

■館蔵資料紹介

きん こ ざね ちゃいとおどしに まいどう ぐ そく

金小札茶糸緋二枚胴具足

菅 昌明 (学芸調査員)



兜 高：18.5cm

胴 高：45.0cm

小札数：2,538枚

この具足は南部家第29代、盛岡藩第3代藩主南部重信(元和2年(1616)～元禄15年(1702))所用の実戦用具足といわれているものです。

南部藩の記録である「御宝蔵御具足帳」の一番最初のページに記載されているのがこの具足です。

具足の特徴は、2,500枚を超える小札(具足を構成する鉄の小片)全てに鍍金がされている点にあります。このように小札全てに鍍金が施され、しかもほぼ完全な形で保存されている具足は大変珍しいといえます。

緋糸の表面は褪色して褐色に見えますが、裏側には本来の茶糸の色が残っているのが見られます。

兜鉢は、鉄錆地六十二間筋兜でシコロの新しさに比べれば古い感じがします。シコロの部分だけを交換して使われたのではなにかと思われま

す。兜の前面にある前立は、高さ55cmもある鳥毛のものが付けられています。

その他前述の「具足帳」には記載されていませんが、勝虫(トンボ)の前立も付いています。勝虫とは、昔からのトンボの異名で、武将たちが「戦いに勝つ」という意味と掛けて使用したようです。

具足自体には南部家の定紋である向鶴紋は見られませんが、具足櫃には定紋が大き

く描かれています。

次に、この具足の持ち主であった南部重信を紹介し

ます。重信は、父利直と閉伊郡花輪の郷土花輪内膳の娘松子の間に生まれたとあります。幼名彦六郎、花原市の華嚴院の住持を師に村の子どもたちに交じって幼年期を過ごしたようです。「南部生まれの南部育ち」というわけです。

元服して花輪彦右衛門重政と改め、南部一門の七戸隼人正の嗣子となり重信となりました。その後、七戸家の当主、盛岡藩の家老として、盛岡藩第2代藩主である兄重直の補佐役を長年にわたり務めたのでした。重直には実子二人、養子がいたようですが夭折、さらに重直自身も継嗣を決めずに没してしまうという事件が盛岡藩を窮地に立たせるのでした。

重直の死後、幕府は盛岡藩十萬石を、重信に盛岡藩八萬石と重信の弟直房に八戸藩創設の二萬石とに分割させるという裁定を下しました。とは云え、盛岡藩自体を考えれば減封となるわけです。しかし、重信は約五十歳を目前に盛岡藩の最盛期を創出するのでした。

(重信の業績)

- 1 八戸藩独立の領地設定、家臣団編成。
- 2 盛岡を水害から守るための、北上川の流路切り替え。「杉土手」造営。
- 3 盛岡城本丸の修復。
- 4 盛岡八幡社設置。
- 5 八幡社の門前町「八幡町」設置。
- 6 領内行政単位「三十三通り」に決定。
- 7 新田開発に尽力、内高五萬石増加の功により、盛岡藩十萬石に復帰。
- 8 常年貢制採用。
- 9 下級家臣の俸禄米増収。
- 10 幕府により従四位下に叙任される。
- 11 北上川に「新山舟橋」設置。
- 12 金山・銅山・製塩開発。盛岡藩黄金時代創出。